

Team チームの動き

大規模な赤潮や貝毒の発生はみられません コイの定期検査など、民間移転や有料化

危機管理チーム

昨年度から赤潮・貝毒発生に関する部門と魚病に関する部門を持つチームが発足しました。今年度前半は、目立った赤潮プランクトンや貝毒の発生はありませんでした。また、魚病部門（海面）では、特筆すべき疾病の発生はないものの滑走細菌症は例年どおり被害を出しています。魚病部門（内水面）では、河川での冷水病が恒常化しており、研究成果が一日も早く実用化できるようにと頑張っています。また、今年度も河川や養殖場でコイヘルペスウイルス病の発生がありました。

この4月から、ニシキゴイ定期検査など無病を確認する検査は、民間検査機関へ移譲したり、有料の依頼試験となりましたが、疾病の蔓延防止に関する診断は、これまでどおり無料で行っていますので、技術支援部に問合せください。

希釈海水飼育でカサゴの生残率 40%達成！

地付き魚生産チーム

地付き魚生産チームでは平成19年12月からカサゴの産仔魚を飼育し、仔魚期特有の斃死が発生するステージの絞込みを行いながら定期的に低塩分耐性試験を実施してきました。これらの結果からカサゴ仔魚期特有の大量減耗に対して希釈海水飼育が有効であることが明らかになり、飼育試験では全長20mmで生残率40%（従来飼育法の約2倍）を達成することができました。

また試験生産されたカサゴ稚魚は全長35～50mmになるまで当センターで中間育成後、放流要望の高い尾道地区を中心に漁業者の手によって約4万尾放流されました。



カサゴ稚魚（全長45mm）

漁獲物の蓄養技術で、計画的な出荷を

地付き魚蓄養・輸送チーム

このチームは、メバルやオニオコゼなどの地付き魚を、商品価値を維持したまま蓄養して、遠距離へ計画的に活魚出荷することを可能にする技術開発に「事前研究」として取り組んでいます。漁獲物を活かしたまま保持することはリスクや手間が伴うため、漁業者の方々にもなじみのないことと思います。それでも漁獲物を計画的に出荷して高く販売することは、現在の厳しい漁業環境の中では必要な技術と考えています。

これまでの取り組みとしては市場や活魚出荷拠点を訪ねて流通動向や現在抱える技術的な問題点を聞取ることによって研究のポイントを探っています。またメバルやオニオコゼの試行的蓄養に組み込み、コストや想定される利益の試算を行っております。



蓄養による価格の安定化が望まれるオニオコゼ

江田島湾の筏の移動を把握しています

かき養殖適正化研究チーム

前年度に引き続き、水産海洋技術センターと保健環境センターの計7名のチーム員で、江田島湾のかき養殖適正化に関する研究を行なっています。筏の移動（写真）などで変動するかき現存量と、それにとりまう海底への負荷量を正確に把握することを目標にしています。今年度から広島大学と共同研究契約を結び、同大学で開発している「江田島湾環境シミュレータ」によって、かき養殖から海底への負荷の影響評価を行なう予定です。



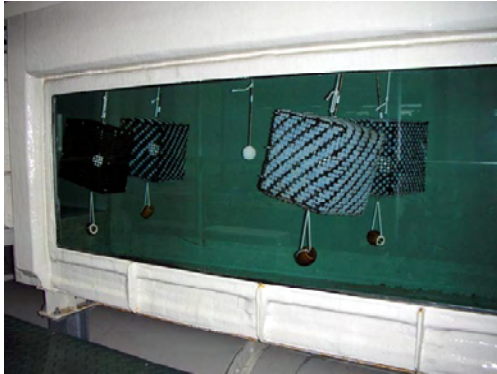
江田島湾内へ移動するかき筏
（江田島湾口部で撮影2007.5.21）

新しい養殖カゴと美味しさ評価法

一粒かき養殖研究チーム

今年度はチーム員の半数以上が入れ替わり戸惑いの中でのスタートとなりました。また、本研究は最終年度を迎えるということもあり、まさに背水の陣で取り組んでいます。この様な状況の中、チーム内では特に研究の遅れていた新しい養殖カゴの開発にチーム一丸となって取り組んでいます。

また、かきの味の特性の把握については、身入り期における漁場の餌環境との関連の調査に備え、屋内試験による餌条件の影響についての検討を行っています。



養殖かごの通水性比較試験（還流水槽）

トピックス

飯田副部長

日本魚病学会研究奨励賞を受賞

「ヒラメ仔魚期のウイルス性疾病に関する研究」に対して、日本魚病学会から研究奨励賞を受賞することができました（平成20年3月27日）。

この研究を続ける中で、ヒラメの種苗生産初期に発生する表皮増生症という疾病の原因がヒラメヘルペスウイルスによる感染症であることを明らかにし、さらに同疾病の分子生物学的検出法及び大量死に至る原因の解明と防除対策を確立することができました。

今回確立できた成果は、広島県だけでなく全国規模で応用可能な技術ですので、種苗の安定生産に大きく寄与できれば幸いです。



永井研究員 日本動物遺伝育種学会での 学会長特別賞の受賞

食品工業技術センターに異動した永井研究員が、日本動物遺伝育種学会第8回大会でポスター発表した「アユ冷水病耐性形質のマーカー選抜育種」（平成19年11月24日）に対して、光栄にも学会長特別賞を受賞することができました。

この研究は、アユの冷水病に対する耐性を遺伝的に解明するため、冷水病に強い系統と弱い系統の交配を繰り返すなかで見出した成果です。地道な研究の積み重ねがこのような結果となったことは、研究当事者としてもうれしい限りです。

現在この研究は水産海洋技術センターで引き続き研究が行われていますので、最終的には冷水病に強いアユの開発につながるよう願っています。



技術支援制度が変わりました！

技術的課題解決支援事業「ギカジ」スタート ウイルス検査など一部有料化

8つの試験研究機関が統合され、設備利用や技術研修などの技術支援事業の手続きが統一されました。

4月から新たに技術的課題解決支援事業（ギカジ）がスタートしました。ミニ受託研究ともいえる事業で、県外の企業からも、魚や環境に関する試験と評価をしてほしいとの依頼や問い合わせがきています。

また、魚病検査に関する依頼試験（有料）もスタートしました。ニシキゴイの春ウイルス血症（svc）がほとんどですが、ヨシエビの検査など種苗生産機関からの依頼も始まりました。魚病発生時の診断については、これまでどおり対応しています。

「ギカジ」や「依頼試験」などの相談は、技術支援部が窓口です。

技術支援部 直通電話 0823 - 51 - 2173